



信子さん宅への訪問診療が始まったのは約1年前。大腸にできた病変からの下血が続いていましたが、年齢を考えると積極的な治療は諦める他なかったようで、正直、こんなにも長くお付き合いすることになろうとはお互いに予想していませんでした。嬉しいことに、信子さんは今も元気はつつつで、いつも満面の笑みで私たちを迎えてくださっています。同居して介護するようになった長女さんから、先日嬉しいお手紙をいただきましたので、同意を得て一部ご紹介いたします。

「この1年間、訪問診療でお世話になり、今後も続くであろう介護の日々の自分なりの思いを手紙でお伝えしようと思います。…最初は不安でした。一緒に暮らしてみても、初めてわかること、ショックも大きく、娘としては落ち込み、涙する日もありました。ただ、毎週のように訪問看護師さんやリハビリの先生、ケアマネの方々、福祉レンタルの方等、母の周りには沢山の支えになって下さる方がいて、その方たちとの関係により、外からの風を吹き込んで下さっているように感じます。…私は、2年半ほど訪問介護ヘルパーの仕事をしていたこともあり、老人の世話は自分なりに明るくできるだろうと思っていました。でも自分の母となると感情のコントロールができず、どうしてわかってくれないの？何回も言ってるのに！と、気がつくとも母に辛い言葉を投げかけていました。何度も紙に書いたり、あっちこちにメモを貼ってみたり、今考えると自分よがりなことがばかりしていましたが、私も必死でした。認知症の人の行動パターンや言動にすべてが当てはまります。母は病氣なんだと頭ではわかります。でも娘としての私は、母の認知症を認めたくなかったのかもしれない。『おはよう！』『あら、あんたいつ来たのさ』『うん、ず〜っといたよ』『そうかい？』そんな会話を毎朝繰り返していました。受け入れなければ！と、自分自身に言い聞かせる日々でした。…それでも、毎日一緒にごはんを食べ、昔の思い出話をしたりしているうちに、少しずつですが、今この時が幸せなんだな〜と感じている私がいまいました。何でもすぐに忘れてしまう母だけれど、目の前にいる母は、私を生み育て、無償の愛を与え続けてくれた母であり、間違いなく今この瞬間生きていてくれる。その母に対してわずかばかりの恩返しをしているような気持ちになってきました。改めて、92歳の母に、生きててくれて

ありがとうございます。心から感謝しています。…先生に出会ってなければ、本当に、介護うつになっていたかもしれません。先生が以前おっしゃっていたと思うのですが、“高齢になると人はだんだんナチュラルになっていく”のかもしれませんが、そう考えると、人は人生の最期に近づくとき色々なものが削げ落ちて本当の素の姿になるのではないのでしょうか。9年前に亡くなった父は胆管癌で亡くなりましたが、認知症はなく最期まで頭がしっかりしていたので、最期はとてもしようでした。人一倍、頑張り屋の父でしたから。あの頃、先生に出会っていたら私は迷わず在宅診療を選んでいたと思います。過ぎたことを今さら悔やんでもしょうがないのですが、それでもやはり考えてしまいます。訪問看護の櫻田所長からの紹介で先生と出会えたことに親子共々本当に感謝しています。これは運命かも？1周年記念のスーパースペシャルな“松山千春”生唄ライブ、最高でした。先生は、母と私のために曲を選んでくださり、言葉では言い表せない位、感動しています。いつも母に寄り添って下さり、笑顔で心地よい風を運んで頂き、ありがとうございます。看護師の寺島さんにも感謝しています。これからも淡淡々と生活できれば、と思っています。精一杯、笑顔で、母らしく、娘らしく。」

長女さんは、若い頃は松山千春の追っかけをしていたほどの大の千春ファン。コンサートには信子さんも何度か一緒に連れて行ったとのこと。松山千春コンサートのDVDも半ば無理やり(笑)貸し出されました。私は緩和ケア病棟を離れてからは封印していたギターを持ち出して千春さんの歌を練習し、出会って1年の訪問診療の際に、記念のミニコンサート(もちろんすべて松山千春の曲)をいたしました。

さて、その日はその後、別の男性患者さんのお看取りがあり、そこにはその患者さんの母親もいました。亡くなった患者さんの子や孫や母親を含む4世代、ことに息子を看取ることになった母親の姿を見ているうちに、千春さんの『生命』という曲が頭に浮かび、急遽ここで演奏させてもらいました。“この子の人生を見届けられるなら 最後まで見守ってあげたいと思うね”で始まる優しい歌です。生命の繋がりと音楽の力を強く感じさせられた1日でした。